

特定非営利活動法人（神奈川県認定）
柔道教育ソリダリティー
10周年記念シンポジウム
「オリンピックを語る」
・リオ五輪から東京五輪へ・」

2017年1月20日（金）
東京ドームホテル
B1階「オーロラ」

パネリスト

山下泰裕・井上康生・
塚田真希・鈴木利一

コーディネーター 野村周平

開会のあいさつ

山下泰裕理事長



まずは、新年おめでとうございませ
す。年始のご多忙なところ、私ども
柔道教育ソリダリティーの10周年

記念シンポジウムに多くの皆さまに
お集まりいただき、誠にありがとう
ございます。

会場に入ってから、これまでのこ
とを頭に浮かべておりました。

本法人設立のきっかけ

奥田碩さんの言葉

2006年4月に、本法人が設立
されました。当時の私は、前体制の
国際柔道連盟で教育コーチング理事
をしておりました。柔道の教育的な
価値を高め、柔道発展途上の国々を
少しでも支援していきたいという思
いで、柔道教育の普及を、コーチン
グ理事という立場でやっておりました。

多くの方々から支援を受けて活
動を進めていたのですが、ひよんな
ご縁から当時、日本経済団体連合会
の理事をされていた奥田碩さんと親
しくなりました。それから「武士道
とともに生きる（角川書店）」とい
う本と一緒に出版しました。あるとき
奥田さんから、このようなことを言
われました。

「山下さんは、いろいろと良いこ
とやっておられるが、どうやらあな
たの限られた時間の多くを、活動の

ための資金集めに使われているよう
です。せっかくですから、小さくて
も組織を作ってやられてはいいか
でしょう？ 広く、薄くでも良いから、
多くの人から協力を得て活動したら
どうですか？ 私の名前はいくらで
も使って構いませんから。そうす
れば、あなたの時間を、良いことをや
るために使えるではないですか」。

そのように、おっしゃっていた
いたことが、本法人を立ちあげる、
きっかけとなりました。副理事長を
引き受けていただいた橋本敏明先生、
事務局長の光本恵子さんに相談をし
まして、10年前の2006年4月に
本法人を立ち上げました。そして、
その年に、第1回目の講演会を奥田
さんをお願いいたしました。東海大
学校友会館で開催した記憶ござい
ます。

中国に2つの友好柔道館を設立

本法人設立後は、我々の活動に多
くの皆さま、企業の方々が賛同して
下さいました。

そして、2007年には中国の青
島市に、日中友好青島柔道館を立ち
あげることができました。今日はわ
ざわざ、青島から徐殿平館長にお

越しただいております。青島で非
常に素晴らしい活動を行っています。
2015年には岸田文雄外務大臣か
ら外務大臣表彰も受けております。

さらに、2010年には中国の南
京市と協力し、日本の外務省からご
理解とご支援いただきながら、日中
友好南京柔道館を立ちあげました。
この2つの柔道館の活動については
何度か報告させていただいておりま
すが、非常に素晴らしい活動をされ
ています。私は、南京の友好柔道館
も、近いうちに必ず外務大臣表彰を
受けるだろうと思っています。

今年の日中国交正常化45周年で
す。私どもの法人にもいろいろなお
話しが来ております。日中関係はな
かなか難しいところもありますが、
そういう厳しい状況だからこそ、草
の根レベルの交流を絶やしてはいけ
ないと思っております。我々に出
るかどうかわかりませんが、様々な
要請に対して前向きに考えていき
たいと思っております。

ロシアとの国際柔道大会

100周年に

次に浮かんでくるのはロシアと
の交流です。ご存知の方もおられる

と思いますが、昨年の12月にプーチン大統領が安倍晋三総理との首脳会談で来日され、その折に大統領が講道館を訪ねられ、私もお会いすることができました。全く想定していなかったのですが、安倍総理と森喜朗元総理も一緒にでした。

今から100年前にロシアのウラジオストクで日本との柔道親善大会が開かれました。これが柔道では初めての国際親善大会でした。実は、

今年が記念すべき100周年に当たります。そこで、日本たばこ産業（JT）さんの協力を得て、記念大会をウラジオストクで開催しようという要請が入りました。しかもこれがなんと「山下泰裕杯」という名称案でした。企画された方には「山下の名前を付ければ、プーチン大統領も来てくれるのでは？」という思惑があったようです。大統領はそれほど私に興味をお持ちではないと思いますが、強く頼まれてお受けすることにになりました。

ところが、このお話がどんどん大きくなりまして、講道館の方でも、プーチン大統領、安倍総理、森元総理にその場でお話しをせざるを得なくなりまして……。このお三方が出席

される今秋のウラジオストクでの経済フォーラムに合わせ、9月の6日と7日に100周年の柔道大会を開催することになりました。

中国同様、日ロ関係も難しいところではあります。しかし、草の根レベルで交流し、お互いに理解し合い、良い関係を作るということが大事であると考えております。

イスラエルとパレスチナの

架け橋に

皆さまのお手元の資料にもご用意しておりますが、本法人では、イスラエルやパレスチナとも交流を進めております。イスラエルとパレスチナを訪問して思うことは、「やはり柔道は素晴らしい。柔道は国と国、人と人をつなぐ力がある」ということです。このことを改めて感じております。

本日もお見えになっておりますが、本法人の小川郷太郎理事に相談したところ、「山下さんと井上康生さんと二人で行って、両地域で指導をしたらいかげんかでしょう。可能であれば両地域の子どもたちを集めて柔道教室ができれば最高ですね」というご提案をいただきました。それをき

っかけとしてスタートしました。

さらに幅広い

柔道を通じた国際貢献を

このようなお話し以外では、リサイクルの柔道衣や畳を開発途上国に送る活動も行っていました。その他、柔道指導者の受け入れや派遣、学生によるボランティア活動などを細々と実施して来ましたが、詳細はこの後、光本事務局長からご報告をさせていただきます。

もともと柔道には、国際的な交流や貢献を通じて平和に寄与する力があつたと思うのですが、日本の柔道界はあまり積極的にこれを展開して来ませんでした。関心も少なかったかもしれません。本法人を立ち上げたことで、外務省や国際交流基金、国際協力機構（JICA）からもお話をいただいで歩いて歩んでこられたと考えております。

しかしながら、このような活動をさらに大きな動きにしていくためには、やはり日本の柔道界全体を巻き込んで進めていかなくてはなりません。リサイクル柔道衣や畳の送付、学生ボランティアの派遣といった活動は、徐々に本法人から全柔連に移

つています。

今の全柔連は、柔道だからこそできる国際貢献ということに非常に高い意識を持っています。ですから、これからは本法人が単独で活動するのではなく、今日お集まりの皆様方にご支援をいただきながら、こういった活動をもっと大きくして、日本の柔道界全体を巻き込んで、柔道だからこそできる国際貢献を進めていくとだと思っております。

そして私は、これは柔道だけでなく他のスポーツでも出来ることだと思っております。試合の勝ち負けや技術の向上だけではなく、異文化交流を進めてお互いを理解しあう。そういう意識を持ってスポーツ活動を進めていくことが大切だと思います。全柔連の実績をもとに、他の競技団体にも提案していきたいと考えております。

皆さまへの感謝の思い

本法人が、10年間に渡ってこうした活動を重ねてくることが出来たのも、会員の皆様や会員企業の方々のご支援、ご協力のおかげです。そして、外務省、国際交流基金、JICA、全柔連、講道館など柔道関

係者の方々のご理解、ご支援があつての活動であつたと実感しております。

そしてこれからも、皆さまから支援しようと思つていただけるような活動を展開していただけるように、身を引き締めて頑張つていこうと思つております。

今日はこの後、リオ五輪柔道男子代表の井上康生監督、女子代表の塚田真希コーチも交えて、「リオ五輪から東京五輪へ」をテーマにシンポジウムを予定しております。お二人から耳寄りな情報も聞けるのではないかと思います。私も楽しみにしております。限られた時間ではありますが、皆さまにとつても充実した時間になりますようお願いいたします。本日は本当にありがとうございます。そしてこれからもよろしくお願いいたします。

10年間の二報告

光本恵子事務局長

それでは、パワーポイントを使いながら、柔道教育ソリダリティーの10年間の活動について、事務局からご報告させていただきます。



短い時間で10年間の振り返ることとは非常に難しいことですが、少し駆け足をしながら、お話をさせていただきます。

イスラエルとパレスチナの

交流事業について



最初にご覧いただくのは、2011年にイスラエルとパレスチナから中学生を招へいし、長崎の平和公園を訪れたときの写真です。イスラエ

ルとパレスチナの子供たちが一緒に写真に写ることは、両地域にとつてはありえないことです。

この写真はそれが実現した貴重な一枚です。日本でだからこそできる交流が、ここにあつたと思つております。

私たちはこの10年間、スポーツを通してお互いを理解し、世界平和に貢献するという理念を掲げて活動してまいりました。私たちの活動のうち、特に教育面での目標は、「柔道で最強の競技者を育てること」ではありません。互いに助け合える社会を作ることが出来る、心身のバランスが取れた人材を育てることが目的です。

私たちは、いろいろな活動事業を具体的に作り上げる過程で、「スポーツは世界の人々と繋がることのできる文化である」ということに気がつきました。

柔道による交流は、文化や宗教などを越えて、世界の人々の異文化理解を深めてくれたのです。同じルールに従つて、正々堂々と戦うフェアプレーの精神は、平和の心を培うものです。人と人との信頼関係を深める交流こそが、互いに助け合える社

会を作る上で、効果的であると確信しております。

このような観点から、スポーツの力を生かしてイスラエルとパレスチナの交流事業を推進できないかと考えました。時間はかかるかもしれませんが、取り組む意義があるはずだと思つたのです。

現地の柔道関係者と信頼関係を構築するのは簡単なことではありませんでした。しかし、細々とでも、継続することが大切だと活動を重ねてまいりました。

この活動は、イスラエルとパレスチナにある日本大使館が、スポーツの力を借りて平和交流ができないかと模索し、本法人の山下理事長に白羽の矢を立てたことがきっかけです。これを受け、紛争が絶えないこの地域で、柔道を通じて人と人とを結ぶこと、日本だからこそできる交流があるのではないかと考えました。初めは、双方からコーチを1人ずつ招待し、日本で指導者研修を受けていただきました。この研修を継続すれば、招へいたコーチの力を借りて、人と人とが交流する活動の橋渡しができるのではないかと考えたのです。日本からも現地に指導者を派遣

し、信頼関係を構築して、事業を継続することを重視し活動を続けてきました。理想と現実はなかなかうまく合致しませんでした。現地では、イスラエルとパレスチナで共通の柔道学校を作ろうという構想が出てきております。小さくとも、少しずつ成果が生まれているのではないかと手ごたえを感じているところです。

近い将来に、検問所を通らずとも、柔道やスポーツを目的に双方を自由に行きできる時代が来るかもしれないと、希望を持って活動しています。

柔道衣や畳の提供 指導者の派遣や受け入れについて

までに、3万3884着の柔道衣を

146カ国に、そして約500畳の畳を世界へと配布してまいりました。

嘉納治五郎師範の創立した柔道は、今や世界の多く(201)の国や地域に普及しております。地球上の多くの国は未だ経済的な発展途上にあり、紛争の絶えない国や地域も少なくありません。そうした国や地域では、柔道衣や畳がない状況でも、稽古に励んでおります。

先ほど理事長がお話しましたように、2年前からは、全柔連の国際貢献にも協力させていただいております。外務省、財界や大使館、JICAなどの支援を得て柔道衣や畳の無償配布をさせていただいております。

柔道用具の無償配布は柔道の発展に非常に大切なことですが、さらに、日本人指導者や選手の派遣、指導者の育成といった人的交流も合わせて行っております。

昨年まで、学生ボランティアを含む80名の指導者を13カ国に派遣することができました。また、選手と指導者は、28カ国から448名を受け入れております。本当に多くの方々が日本に来て下さったのだと改

めて感謝しております。



6年前にイスラエルとパレスチナの指導者の研修としてスタートした研修会ですが、昨年は10カ国から指導者を招へいしました。研修期間中には必ず、広島と京都を訪れ、日本の歴史や文化にも触れていただいております。これこそ、私たちが目指している、柔道だからできる、日本人だからできる国際交流だと思っております。

中国、ロシアとの国際交流について

私たちは、外務省の「草の根文化無償資金協力」を頂いて、中国の青島市と南京市に日中友好柔道館を開館いたしました。青島の柔道館は開館10周年を迎えます。今年の日中国交正常化45周年を迎えたことから、柔道を通じた数多くのイベントも計

画されていると聞いています。

草の根文化無償資金協力で建設された道場に、ソフトウエアの部分でこれからも支援していきたいと思っております。中国の柔道人口、特に子供たちの柔道人口はうなぎのぼりだと聞いております。これは、柔道が基本的なスポーツとして、中国の方々に受け入れられた、ということではないでしょうか。

中国との交流と同じように、ロシアとの交流も進めております。プーチン大統領は柔道をこよなく愛し、柔道で学んだ哲学をご自分の人生に生かされております。日口の柔道交流では、これまで主として人的な交流を基盤に進めてまいりました。

山下理事長が先ほど申しましたように、先ごろは来日されたプーチン大統領と理事長が対談した他、9月にウラジオストクで山下泰裕柔道杯も行われる予定です。今年、ロシアで柔道の国際大会が開催されるから100年を迎えます。その、記念すべき年に、山下泰裕の冠大会ができるということは私ども大変嬉しく思う次第です。



さて、話題は変わりますが、私たちの事業の柱のひとつに、柔道衣や畳の再利用があります。昨年の12月

スポーツを通じた国際交流と

平和について

また、本法人の会報誌も20号を発行し、講演会・シンポジウムも皆さんの協力を得て19回を数えました。本日のシンポジウムでは、リオ五輪に出場された監督やコーチの方々をお招きしております。選手を含めて、皆様のご活躍については、私どももサポートをさせていただいた立場から、大変嬉しく、誇りに思っております。

オリンピックに参加された選手や指導者、スタッフの皆さまの様子を見し、クーベルタン男爵のメッセージに重ねてみました。

「オリンピックで最も重要なことは勝つことではなく、参加することである。同様に人生においても最も重要なことは勝つことではなく、努力することである。大事なことは、競技者になったということではなく、けなげに戦ったということである。オリンピックは単なる世界選手権大会ではなく、それは平和と青春の花園である。スポーツを通じて、世界は一つになる」

クーベルタン男爵は、近代スポーツの重要性を説いていました。世界

中を視察し、世界から選手を招待している中で、スポーツのもう一つの役割、スポーツを通じた国際交流や平和が見えていたのではないのでしょうか。

これは、私たちが理念として掲げている「柔道・友情・平和」に通じるものであります。この言葉は、東海大学の創設者、松前重義博士が山下理事長に託したものです。

柔道の活動を通して、世界の平和を維持するこの言葉は、クーベルタン男爵の言葉と重なる気がしてなりません。

小さなNPO法人ではありませんが、柔道を通じた活動で友情を育み、世界が平和になるよう、社会に貢献したいと思っております。

最後になりますが、毎日新聞と朝日新聞に私たちの活動について取り上げていただきました。受付でお渡しした資料に、記事の切抜きがありますのでぜひご覧下さい。

10周年記念シンポジウム



パネリスト

山下泰裕 (本法人理事長)

井上康生

(東海大学体育学部准教授・全日本柔道男子監督)

塚田真希

(東海大学体育学部講師・全日本女子強化コーチ)

鈴木利一

(独立行政法人日本スポーツ振興センターハイパフォーマンスサポート事業)

パフォーマンス分析(映像・分析)柔道担当

コーディネーター

野村周平

(朝日新聞リオ五輪担当記者)

す。続きまして、井上康生東海大学体育学部准教授、全日本柔道男子監督です。次に、塚田真希東海大学体育学部講師、全日本柔道女子強化コーチです。さらに、日本スポーツ振興センターから鈴木利一さんにもご参加いただきました。そして、本日のコーディネーターは、朝日新聞リオ五輪担当記者の野村周平さんをお願いしております。

座談会に入る前に、パネリストの方々に、オリンピックについてお話を聞きたいと思っております。山下理事長からお願いいたします。

山下 オリンピックについて語るということですが、今回のリオ五輪での日本柔道の活躍については、井上監督や塚田コーチらがお話をしてくれると思います。

私は今回、日本選手団の副団長として行って参りました。日本選手団の視点でリオ五輪を総括し、2020年の東京五輪に向けてのお話しをしたいと思います。

リオ五輪で日本が獲得した金メダルは12個で、メダルの総数は41でした。前回のロンドン五輪も、金メダル7個、メダル総数の38と過去

に例を見ない成果でしたが、リオ五輪ではそれを超えて41個のメダルを獲得したわけです。大会前に選手団が掲げていた金メダルの目標は14個で、総数は30でしたから、金メダルこそ2個足りませんでした。総数では11個も上回ることができました。

さて、私は2013年に日本オリンピック委員会（JOC）の理事になりましたが、最初に仰せつかったのは日本のスポーツ界から暴力を根絶することでした。当時、国際オリンピック委員会が「アントラージュ」という組織を立ち上げました。日本ではあまり聞きなれない言葉ですが、フランス語で「環境」を意味する言葉です。競技環境を整備して、アスリートが最大限にパフォーマンスを発揮できるように連携、協力する組織を定義しています。

各国のオリンピック委員会でも同時に立ち上げられ、日本でもスタートしたその委員会では私は部長を仰せつかり、暴力の根絶に取り組んだというわけです。柔道界は暴力の問題で日本のスポーツ界に迷惑をかけました。ですから山下が中心になって、日本のスポーツ界から暴力を

根絶しなさいということでした。

暴力の他にも、選手を取り巻く環境で注目されるのは、選手選考のあり方や組織のことです。ガバナンスやコンプライアンス、さらにはマスコミとの関係も少しずつ変えていく必要があると言われています。

このような課題に取り組む委員会で部長を務めていたのですが、そうこうしているうちに、2016年のリオ五輪と2020年の東京五輪に向けて、選手強化本部の副本部長に任命されました。日本選手全体の強化育成に直接関わるようになったというわけです。

さらに副本部長をお引き受けして3カ月後には、リオ五輪日本選手団の団長を務められた橋本聖子さんから副本部長就任の打診がありました。選手強化本部に携わってわずか3ヶ月で五輪選手団の副本部長とは、ずいぶんいいかげんな組織だなと思ったものです（笑）。

いきなりの副本部長ですから、わからないことだらけだったのですが、最初に感じたことは日本選手団の一体感の素晴らしさでした。「我々はチームとして戦っているのだ」という意識が、良い感じで醸成されている

ことを強く感じました。その理由の一つに2008年に完成したナショナルトレーニングセンターの存在があると思います。

今は、味の素ナショナルトレーニングセンターという名称ですが、これによって選手たちが練習に集中できる環境ができたのです。センターの隣には日本スポーツ科学センターがあり、練習に集中できる環境と、日本でも最先端の医科学的サポートが受けられる環境が整いました。

そこでは、さまざまな競技団体が同時に合宿体制で練習でき、他の競技団体との交流も非常に盛んになりました。そこで情報を交換し、共有できたことがチームジャパンの雰囲気や一体感を醸成する上で、非常に大きな役割を果たしたと思っています。

本日は、ロス五輪と一緒に金メダルを獲得したレスリングの富山英明先生にもご出席をいただいております。我々が選手のころは、オリンピックやユニバーシアード以外で他の競技の方と一緒することはあまりありませんでした。ですから、オリンピックに行つてから他競技の選手のお名前やお顔を知ることので、

日本選手団としての一体感は希薄だったと思います。けれども今は、ナショナルトレーニングセンターがあることで、他の競技団体とも仲良くすることができている。これが大きいのではないかと思います。

私は2001年頃、衆議院の文教委員会ですports振興に関する会議が行われた折、参考人として招致を受けました。そこで、「世界ではどの国でも一般的な施設なのに、どうして日本にはナショナルトレーニングセンターがないのか」とその必要性を熱く訴えました。

会議の後に、委員長を務めておられた今の衆議院議長でもある大島理事さんから質問を受けました。「山下君の話聞いて、ナショナルトレーニングセンターの必要性を強く感じましたが、どうして他の国にあって日本にはまだないのですか」と。

私は、あまり賢くないものですが、つい正直にお答えしました。「スポーツが選挙の票につながらないからではないですか?」。「政治家の先生方は票にならないことに関心がないからでしょうか?」と口をついて出てしまいました。文教委員会の方々のお顔が引きつりました。私も

「しまった！」と思ったのですが後の祭りです。

大島委員長に「山下君。我々は票にならなくても必要なことはやります」とたしなめられました。

そうして、スポーツ界や政財界など各界からのご協力があがり、ナショナルトレーニングセンターが完成しました。今回、日本選手団の副団長としてリオ五輪に参加して、改めてこのことが非常に大きかったと強く感じた次第です。

もう一つ、今回のオリンピックで印象に残っているのは、競り合った場面での日本選手の強さです。追い込まれた状況からの逆転劇が数多く見られました。

まず頭に浮かぶのはレスリングの女子です。他にも卓球やバドミントンなど多くの競技で、追い込まれたぎりぎりの状況でも最後まで諦めない、己を信じ、仲間を信じて最後まで全力を出し切る選手たちの姿が見られました。この戦いぶりに、日本の多くの方々が感動されたのではないかと思います。

私が選手や監督だったころはどうだったでしょうか？ 日本選手は海外での試合に弱い、プレッシャー

に弱い、オリンピックになると力を発揮できない、という負のイメージがあったような気がします。皆さんもそう思われませんか？

しかし、柔道を含めて今の選手たちは精神的にとてもたくましい。逆境にもひるまず、己を信じてひたむきに戦う姿は、我々の心を強く打つものがあります。その一方で課題もいくつか見つかりました。中でもチーム競技の不振は問題です。

ロンドン五輪を振り返ってみますと、サッカーの女子が銀メダルに輝き、バレーボールの女子も銅メダルを獲得しました。今回は、体操や卓球、シンクロの団体、陸上のリレーといった種目はさておき、いわゆるチーム競技でのメダル獲得数は0でした。それどころかオリンピックに出場できたチーム競技そのものが少なかったのです。

個人種目と比べて、チーム競技でオリンピックに出場することは容易ではありません。各競技とも8カ国から12カ国ほどしか出場枠がありませんから、前年度の国際大会の優勝チームや2位のチーム、それに大陸の予選を勝ち上がった国しか出られないのです。ですから、オリン

ピックに出場するだけでも大きな意義があり、チーム競技で獲得したメダルは、個人競技の10倍ぐらいの価値があるのではないかと、私個人は思うほどです。

2020年の東京五輪は、日本開催ですからほとんどの競技団体がチーム競技に出場できるはずで、そこで、まずはチーム競技の奮起を促したいと思います。チーム競技が頑張ることによって、東京五輪がさらに盛り上がっていくはずで、そしてもう一つ。先ほど、競り合った時の日本選手の強さを褒めましたが、見方を変えますと、体操、バドミントン、卓球のどの試合も紙一重の勝負だったと言うことです。金メダルの獲得を常に意識するのであれば、やはりしっかりとした力の層を作っていく必要があります。我々は2020年の東京五輪で金メダル30個を目標に掲げています。ぎりぎりの試合を勝ち抜く力も必要ですが、そのためには圧倒的な力も必要だろうと思っております。

さらに気になるのは、リオ五輪では限られた競技でのメダルが多かったということ。レスリング、体操、水泳、柔道といった競技にメダ

ルが偏っていました。しかし2020年に向けては、今までメダルを獲得したことがない、オリンピックに出たことがない競技を底上げしていかないと、金メダルやメダル総数の倍増という目標は達成できないのではないかと考えています。

レスリング、体操、水泳、柔道の4競技は世界でもトップクラスの力を持っています。また、今回初めてメダルを獲得した勢いのある競技団体もあります。これらの競技の経験やノウハウを全ての競技で共有し、まだメダルには届かない、ほとんど五輪に出ていない競技の底上げをしていかなければなりません。

選手強化本部では、全ての競技でメダルの獲得を目指しています。容易でないことは分かっていますが、その目標に向けて力を継承していかなくてはなりません。

また、東京五輪では、日本で人気のある野球やソフトボールなど、メダルの獲得が期待できる競技も復活します。さらに、新しい競技や種目の活躍も期待しつつ、メダル獲得の倍増を目指していきたいと思っています。

もう一つ大切に忘れてはならないのがパラリンピックです。オリンピックとパラリンピックの両方が成功してこそ、2020年東京五輪の成功だと思っております。

柔道でも新しい体制が2013年8月に出来上がり、2014年2月には日本視覚障害者柔道連盟との連携をスタートしました。目に不自由のある柔道選手をどのように育成していくかについて、全柔連でも取り組んでいるところです。私は今、ナショナルトレーニングセンターのセンター長も務めております。オリンピックとパラリンピックによる施設の共同利用も進めて行かなくてはと思っております。

最後に、一番申し上げたいことをお話します。2020年の東京オリンピック・パラリンピックを「レガシーにする」という言葉を良く耳にします。けれど、日本選手が活躍するだけではレガシーにはならないと思います。

東京オリンピックが「スポーツの裾野を広げていく切っ掛けとなるか？」が大切な要素だと考えます。そのためには、日本体育協会や各競技団体などが積極的に取り組んでい

なくてはならないと思うのです。

今の若者たちは、コミュニケーション能力に課題があり、心が折れやすく、「キレ」やすいと言われております。本法人の講演会でスポーツジャーナリストの宮嶋泰子さんが、自殺者が多かったフィンランドがスポーツ振興政策によって立ち直った、という話をされていました。国民の「参加するスポーツ」への熱意が一番高いのはフィンランドではないかというお話です。

日本でも、スポーツへの関心が高まる2020年を契機に、我々競技者だけに限らず、小さな子どもからお年寄り、身体に不自由のある方々まで、スポーツの裾野を広げていきたいと思っております。それができて初めて、2020年の東京オリンピックとパラリンピックが、本当の意味でレガシーになるのではないかと思うのです。

2020年に向け、私もさらに責任のある立場になっていくと思えます。多くの日本のスポーツを愛する方々と力を合わせて、2020年の東京オリンピックとパラリンピックの成功を目指してやっていきたいと思っております。どうぞよろしくお願

いたします。

光本 続きまして、東海大学体育学部准教授で、全日本男子柔道監督の井上康生さんにお話しをいただきます。



井上 ご紹介をいただきました井上康生です。はじめに、NPO法人柔道教育ソリダリティーの10周年を心よりお祝い申し上げます。その記念すべき日にパネリストとしてお招きいただき、本当に嬉しく思っております。

私自身も、柔道教育ソリダリティーの活動に何度か関わらせていただき、先ほどのように、今日までの歴史を拝見すると、本当に素晴らしい活動をされているのだなと感動を覚えます。柔道の力、スポーツの力というのはこれほどにも偉大な物なのだなど、改めて感じさせていただき

ました。私は全日本男子柔道監督を務めさせていただいております。そうした役割からも、柔道やスポーツの素晴らしさを社会に伝えていきたいと思っております。今後も柔道教育ソリダリティーの活動を手伝わせていただく機会がありましたら、喜んでやらせていただきます。

先ほど、事務局の方から山下先生に、お時間なのでお話を終えてください、というような指示が出ておりましたが、私なら山下先生にそんなことはとても出来ません(笑)。冒頭のコメントは一人15分ずつだと伺いましたが、山下先生が超過した時間を逆算しますと、私は恐らく3、4分で終わらなければならぬと思っております。短めにリオ五輪について振り返りたいと思います。



リオ五輪は、柔道男子は7階級中、

7階級全てでメダルを獲得することができました。金メダルが2階級、銀メダルは3階級、残りが銅メダルです。柔道がオリンピック種目に採用された当時は4階級だったと思いますが、この結果はそれ以来の快挙です。選手やコーチ、スタッフが頑張って、チームを一つにまとめることができたからではないでしょうか。そして皆さまに、多くのご支援、ご声援をいただいたおかげだと思っております。この場をお借りしてお礼を申し上げます。

しかし監督としては、世界選手権などで見せた選手一人ひとりの能力を考えれば、リオ五輪の成績も決して大成功ではなかったのではないかと思います。私は幸運にも、2020年の東京五輪に向けて監督を続投させていただくことになりましたので、東京五輪では今回以上の結果を出せるように頑張りたいと思います。

さて、私は全日本の監督を拝命してから、この4年間に「5つ」のことに取り組んできました。

1つ目は「意識」です。選手たちにはいろいろな言葉で伝えてきましたが、私は「最強で最高の選手の育

成」を目標に掲げて、監督の任務に取り組んできたつもりです。それが、オリンピックで勝つために必要なことだと思っておりますし、柔道界がこれから勝ち続けるために必要なことだと思っております。この「柱」の下に、選手には明確に目標を設定させ、1年、1年戦っていくという形をとりました。

これにしっかりと取り組んだオリンピックの代表選手たちは、私が指示を出すまでもなく、本当に成熟した、自分自身で戦える集団になってくれました。だからこそ今回の結果になったのではないかと思っています。

2つ目に求めたのは「強さ」です。「どのような状況になっても負けないう、どのような環境であろうが勝てる選手を作る」ことも目標に掲げました。

試合では、最後まで何が起こるかわかりません。オリンピックの試合では本当に何が起こるのかわかりません。そこで私は、どういう状況になろうが、不測の事態に対応できる細部の技術をもった選手を育成することを意識して指導してきました。

それには、試合前の準備が本当に

大切です。その重要性を、うるさいほど徹底して選手たちに伝えてきました。選手たちがそのことをしっかりと受け止めてくれたおかげで、オリンピックの調整会場で、私が選手たちに何か言うことはほとんどありませんでした。選手たちは、事前に必要なことをしっかりと見据えて試合に臨んでくれました。それが結果につながったのだと思っています。

3つ目は「体力」です。日本の柔道界は元来、技術を重視した考え方が強いのです。世界と戦う上で技術力はもちろん必要です。しかし、その技術を使うための体力がないと、もはや世界とは戦えません。「柔剛一体」という言葉がありますが、技と体力が一体となつて備わっている選手でない、今の世界では勝てないのです。このことを目標に掲げて、トレーニング方法や栄養面などを一つ一つ変えながら取り組んでまいりました。

4つ目は「組織力」で、それはコーチやスタッフの重要性を意味しています。最近皆さまざまから「井上は素晴らしい監督だ」と言っていたりしてありますが、それはほとんど言っていたかとして(笑)。今回の結

果は正直なところ、トレーニングや栄養面などで携わってくれたメンバー、担当コーチたちが死に物狂いで選手たちをサポートしてくれたからだと思います。今日ご出席の鈴木さんも、分析コーチとして何千通りもの分析を行い、我々に的確なデータを提供してくれました。

では、監督の私は何をやってたのかというと、情報の共有化や、コーチの皆さんが仕事に生きがいややりがいを持てるような環境づくりに努めていました。

リオ五輪の柔道会場にはコーチボックスがあるのですが、試合中も監督の私がそこに立つのではなく、それぞれの選手の担当コーチにその場をお願いし、選手の身近で指示を出してもらいました。選手とコーチが信頼しあい、私がコーチを信頼しているからこそこの体制です。井上がコーチボックスに立たない理由は、そのようにご理解いただければと思います。決して私が何もしていないわけではございません。

最後に5つ目は「科学の力」の導入です。データや映像の進歩は本当に凄いなと思います。インターネットのYouTubeなどで全試合が配信され、

選手たちは一試合ごとに丸裸にされてしまう時代なのです。データや映像を活用しないと、隙のない選手を育てられませんかし、競技においても勝利はないと思っています。

私はこの4年間、大きく分けてこの5つの目標や指針を掲げながら、精一杯戦ってきました。オリンピックというのはスポーツ選手にとって最高の舞台です。関わる人々を大きく成長させ、人々に感動を与えてくれます。オリンピックでの勝利は素晴らしいものですが、やはり勝つことだけが全てではありません。私は、柔道のみならず、スポーツ全般やオリンピックがいかに価値あるものかということ、皆さんに理解していただけるよう取り組んで行きたいと思っております。私も少し長くなってしまいました。ご静聴ありがとうございます。

光本 ありがとうございます。それでは続きまして、東海大学体育学部講師で全日本女子強化コーチの塚田真希さん、よろしくお願います。

塚田 ただいまご紹介にあずかりました塚田です。このたびは柔道教育

ソリダリティーの10周年、本当におめでとうございます。このように貴重な機会をいただいたことに感謝してお話をさせていただきたいと思っています。



私は全日本女子柔道のコーチとしてリオ五輪に帯同してまいりました。私は78キロ級の梅木真美選手の担当コーチを務めさせていただきました。彼女はオリンピックで力を発揮することができず、メダルに絡むことはできませんでしたが、もう一人、東海大学を拠点に活動している田知本遥選手も少しサポートしてきただけで、今日はその話もさせていた

リオ五輪で金メダルを獲得した田知本選手ですが、代表選考の時点ではかなり苦しい状況で、第一候補選手ではありませんでした。しかし、最終代表選考の場で最有力候補だった

た選手に勝って代表の座を獲得しました。リオ五輪でも強豪ひしめく厳しいブロックに入りましたが、ノースードから逆転に次ぐ逆転で勝ち上がり、さらにはゴールデンスコア方式の延長戦も勝って決勝戦に進出、これまでなかなか勝てなかった相手を破って見事に金メダルを手に入れました。

そういうプロセスの中で、田知本選手に対して何ができたのかを振り返った時に、コーチの仕事とは、選手をいろいろとマネジメントすることなのかと思うに至りました。実際に担当コーチを務めさせてもらった梅木選手については、彼女の持っている強さをしっかりと発揮させてあげることが出来ませんでした。とても後悔しているところですが、結果が出なければ、やってきたことが不正解になってしまうということを、今回のリオ五輪で改めて感じました。

このような中で私は、改めて20年の東京五輪に向けてスタッフとして関わるチャンスを提供いただきました。日本で開催されるオリンピックを成功させられるように、監督の下で選手たちをサポートしていくことが自分の役割ではないかなと思っ

ています。今日はどうぞよろしくお願います。

光本 ありがとうございます。それではお待ちせしました、野村さん。熱きパネリストたちをまとめていくのは大変だと思いますが、よろしくお願いたします。

野村 今は朝日新聞の社会部で記者をやっておりますが、リオ五輪では運動部の記者として柔道やレスリングを担当させていただきました野村周平と申します。よろしくお願いたします。



このたびは柔道教育ソリダリティーの10周年という大変光栄な場にお呼びいただき、非常に緊張しております。今までも東海大学によく取材で寄らせていただき、国際貢献のお話しをお聞きし、「強さだけでなくもの」を取材の中で表せるかと思

っておりました。もちろんメダルも大切ですが、それ以上に柔道の普遍的な価値をどうやったら社会に伝えられるかを考えていたことが山下先生や光本さんに伝わったからこそ、この場に呼んでいただけたのだと思っています。本日はよろしくお願いたします。

それではさっそく始めさせていただきます。リオ五輪で柔道が12個のメダルを獲得したことで、世間は改めて凄い選手がたくさんいることに気づかされたと思います。そこで、どうしてこれだけの活躍ができたのかを振り返りたいと思います。先ほど井上監督がおっしゃった課題にも触れながら、柔道も変化、進化する中で2020年に向けてどのような取り組みでいくのか、まずは井上監督に伺います。

井上 はい！

野村 先ほどのお話にもありますが、科学の力も活用し、選手の肉体改造やデータの活用を重視して改革されたということは私も取材で伺いました。それではどのように肉體改造に取り組んだのでしょうか？

井上 それでは、準備をしてきたスライドを見ていただきたいと思います。この写真の選手は、世界選手権7連覇という偉業を成し遂げているフランスのリネール選手です。



今回のリオ五輪でも日本の原沢選手が敗れてしまいました。写真では分りにくいですが、この選手は身長が2メートル4、5センチで、体重が145キロと言われています。その体で、これだけ鍛え上げられた肩の筋肉、大胸筋、腹筋を持っています。こういう筋肉をした選手が日本にどれだけいるでしょうか。私は日本人選手では一人も見ることがありません。この選手に技術だけで勝るとは思えませんでした。そこで体力という「柱」を設定して、体力をとことんまでつけていくことに取り組んだわけです。次の写真も海外の選手です。

90キロ級の選手ですが、撮影当時

は19歳でこの筋肉です。今回優勝した日本のベイカー茉秋選手は、昨年の世界選手権で負けています。



これだけの筋力を持った選手を相手にするのに、「日本人は技術力だけで大丈夫。体力は不要ですよ」という方はおられますか？ という訳で、体力作りに取り組んだわけです。どのように取り組んだかといいますが、トレーニングのプロフェッショナルにお願いしました。さらに体力をつけていくには栄養の摂取も大切です。ですから、フィジカルスタッフとしてボディビルダーの方や栄養スタッフに来ていただきました。フィジカルコーチの方は本当に恐ろしいほどの身体、筋肉をされています。このような方々を集めて指導をしてもらったおかげで、リオ五輪では力負けた選手はほとんどいなかったと思います。

野村 監督に就任されたばかりの時

と、リオ五輪を迎えられた時で、選手たちの意識は食事面やトレーニング目においてどのように変わっていききましたか？

井上 簡単に言うと、選手たちのトレーニングに対する知識量が大きく変わったと思います。トレーニングでも食事に関しても、選手たちは非常にマニアックなところにまで知識を深めてくれました。基礎知識が身に付くと意識はどんどん向上するものですね。

野村 ボディビルダーの岡田コーチは本当に面白い方で、我々マスコミも、いろいろなデータを使って取材に伝えてくださいました。例えば、成人男子の1日の平均摂取カロリーは2000キロカロリーぐらいなのですが、世界一のボディビルダーは5000キロカロリーほど摂取するそうです。そう考えると、朝からどれぐらいプロテインを摂取するのか、なぜ昼食を食べなくてはいけないのか、ということ理詰めで説き、しかも本人の身体で証明してくれるわけです。

岡田先生はボディビルダーです

から、いわゆる「見える、美しい筋肉」を追求する世界の方だと思ひ、柔道とは関係が薄いのではないかと疑問視したのですが、井上監督はなぜ岡田先生を採用されたのですか？

井上 まず、彼自身が元は柔道家であるということが非常に大きかったです。そして東京大学の大学院を修了されていることも理由です。私は柔道だけではなく、それ以外の分野の視点から柔道に力を注いでくれる人材を欲していました。そして岡田先生と私は、性格もとてもマッチしました。そこで協力をお願いしたという訳です。

野村 次に塚田先生にお伺いしたいのですが、女子は、筋力トレーニンングをかなり頑張ったと思うのですが、具体的にどのような取り組みをされたのですか？

塚田 特に70キロ級と78キロ級の選手で海外選手と筋肉量が違うということを認識し、スタツフと情報共有しながら対策を探りました。ですが、代表チームとして特定の階級だけで取り組むまでには至りません

でした。そこで、代表チームのトレーナーと選手の所属先のトレーナーにも協力をお願いし、個々の選手に必要なと思われるトレーニンングを継続して指導してもらいました。

リオ五輪の試合前計量の際、78キロ級で優勝したケイラ・ハリソン選手の背中を見て、男子コーチでもある鈴木桂治さんが、「男子みたい」と言っていました。私も、日本人もハリソン選手ぐらい鍛えないといけないなど衝撃を受けました。

野村 塚田選手の現役時代と今の女子のトレーニンングは変わってきていますか？

塚田 はい。日本の選手も筋肉を鍛えなければいけないとは話しましたが、これまで全く鍛えていなかったということはありません。代表チームも以前から取り組んでいましたし、そういう考えがジュニア世代にも浸透している手応えは感じています。

体型も変わってきていて、以前なら57キロ級あたりの選手なら走るのも早いという印象でしたが、今は70キロ級や78キロ級の選手でも、軽量級の選手と変わらないスピード

で走ることができています。ただ、井上監督がおっしゃるようなウエイトトレーニンングや栄養学の面はまだ不足していたのかなと振り返るところです。

野村 2020年の東京五輪に向けて女子の監督が変わりましたが、そのあたりも改善されると考えても良いのでしょうか？

塚田 そうですね。増地監督は、重量級は特別だと常々話しておられます。合宿で各階級と一緒に集まりはするけれど、トレーニンングは別メニューでも良いのではないかと考えておられるようですね。

野村 リオ五輪や世界選手権などを取材するにあたって、我々記者はコーチの皆さんから詳しいデータに基づいて選手の状態を説明していただいています。例えば、60キロ級のこの選手は仕掛ける技の何十%が内股だ、といったデータを教えていただくことで、試合の結果やポイントを伝える上でも理解を深めることにつながっています。データは試合に臨む選手であればなおさら重要なこと

で、隙のない選手を育てるために役に立つと思うのですが、実際にデータを活用する上で、気を付けた点、難しかった点はどこですか？

井上 データに関するご質問の前に、先ほどの体力、筋力のことについて、一つ付け加えさせていただきたいことがあります。オリンピックや全日本などの頂点に立たれた山下先生も塚田選手も、圧倒的に力の強い選手でした。

私は、お二人と対戦した方々にお話を伺ったのですが、全日本で山下先生と戦われた方が、「山下先生と組んだ時、腕だけで吊り上げられているような感覚だった」と振り返っておられました。また、塚田先生と対戦した方は、「奥襟をぐつと持たれると、何も動きができなかった」と話しておられた。

軽量級の試合では、これほど圧倒的な筋力の差を感じることはあまりないのではないのでしょうか。柔道は階級別で、体格が同じ選手同士が戦いますから、軽いクラスでは筋肉量の差はあまりないかもしれません。しかし重量級では筋力の差が如実に出てくるので、体力の必要性が増すのではないかとことです。

では、データについてですが、リオ五輪でも非常に活用させていたいただきました。特にオリンピックの場でもとても印象的だったのは、オリンピックならではの審判の反則の取り方や時間の使い方を理解する上でも役に立ったということです。

例えば、「攻撃をしていませんよ」という反則についてですが、一般の国際大会ではすぐに指導を与えて、試合を終わらせるといふ傾向があったのですが、オリンピックでは非常にそれが遅かったです。

オリンピックの審判の方々に、反則ではなく、技で勝負を決めていくという取り決めがあったかどうかは分かりません。けれど、そのような傾向があることを我々の情報班がいち早く察知し、数字にしてくれました。それを次の日の選手に伝え、対策が取れたことは非常に大きかったと思います。

もう一点は映像ですね。90キロ級で優勝したベイカー・茉秋選手が準決勝で対戦した選手は、はっきり言ってノーマークの選手でした。野村さんが先ほどおっしゃっていた、我々とメディアの皆さんによる情報共有の場のことですが、その時にも相手

選手の名前は出ていませんでしたよね？

野村 はい。出ていません。

井上 そうですよ、そういうノーマークの選手でした。その選手が優勝候補の3人の選手と同じ技の一本勝ちで準決勝まで上がってきたのです。

この選手についても我々の情報班は1回戦からビデオを撮影していました。すぐにベイカー選手と廣川担当コーチにも動画を見せ、その選手を研究することが出来ました。ベイカー選手は間違いなく、そのおかげで相手の技を封じて、自分の形で相手を仕留めることができたと思います。そういう情報がなかったら、違う結果になっていたかもしれない。

野村 それでは鈴木さん、ベイカー・茉秋選手と対戦したノーマークの中国選手が勝ち上がったとき、情報班ではどのような感じだったのでしょうか？

鈴木 はい。情報担当の鈴木です。

まず、その中国選手は「神っている」というか、すごく乗っていました。五輪では実力を出し切れない「逆の状態」はよくあるのですが、今回のような例はあまりありません。それが、その選手は全て同じ技で一本勝ちを重ねていたのも、もしかしたらベイカー選手とあたるかもしれないということ、すぐに撮影データをパソコンに落とし込んで、連絡をしました。

野村 すぐにデータをまとめないといけないという感でしたか？

鈴木 世界選手権などの国際大会では、想定内の選手に関しては事前に準備をしております。また、監督から常々、最悪の状況を想定するようにも言われているので、現地ですぐに準備に当たることが出来ました。

野村 中国の選手が勝ち上がったとき、井上監督はベイカー選手にどのような対策を伝えたのですか？

井上 準々決勝と準決勝の間には、およそ1時間半から2時間ほど時間が空きます。これは裏話なのですが、

この時間にベイカー選手がとった行動がとても面白かったのです。

7階級7人の選手で行動パターンはそれぞれですが、その中で彼は、大舞台になればなるほど、緊張が高まれば高まるほど力を発揮できる、動じない選手なのです。情報班が汗水流しながら情報を分析して集約し、アイパッドにデータを落とす最中に、彼はアップ場の真ん中で一人、栄養士からもらったおにぎりやお肉をずらりと椅子の周りに並べて、オレンジジュースも置いて、もくもくと美味しそうに食べているのです。私は、それを見ていて、彼はオリンピックにきているのではなく、ピクニックに来ているのではないかという錯覚を起しました。

他の選手からすれば、なんて緊張感のない、どういう心理状態なのだろうと驚いたことでしょう。何と言いましよ、会場全体を、そういう彼のオーラが支配していたのです。その時点で私は、これは勝てるのではないかという予感を持ちました。

その後、中国選手のビデオが届いて、私よりも廣川先生がベイカー選手を上手くコントロールしてくれました。ベイカー選手にしてみれば、

一緒に何度か練習したことがある相手だったので、「いつもと同じでしょう？」という感じだったと思います。ですが、担当コーチと会話を重ねながら、一度見ておこうと動画を見始めてからは食い入るように画面を見つめていました。そうして、試合では相手の長所を見事に消し、勝利した姿は流石だなと思いましたね。

野村 ベイカー選手は、映像で見るととても好青年に見えるのですが、取材する僕等からすると、掴みどころのないというか、まさに「新種」というタイプです。話をしても、話の内容がよく飛びます。おそらくコーチの方々も井上先生も、彼を指導して何かを伝える際にすごく苦労されたのではないのでしょうか。ベイカー選手にデータを見せるにしても、廣川先生が彼の性格を把握してタイミングを計ったりされたのだと思います。

データは、使いどころが大切だと思うのですね。単に数字だけを教えるだけ良い訳でもありませんし、映像だけ見せればいいわけでも有りません。そのあたりの難しさはありますか？

井上 今はインターネットの発達などで、あらゆる情報が我々に入ってきます。ですが、その情報を全て鵜呑みにして、全て信じた上で使っていくと痛い目を見ます。例えばある大会で、優勝候補だった選手が自分のフェイスブックにケガをしたという情報を書き込んでいました。それを鵜呑みにして大会に臨んだところ、彼はびんぴんとして元気な状態が出てきた。そういうこともあるのです。ですから先ほどの「最悪の想定」ではありませんが、「相手は常に万全である」と考えておかないといけません。情報は、きちんとした根拠を持つて使わないと、逆にマイナスになるケースがあります。ベイカー選手は、必要なものに関しては非常に敏感に取り入れる選手です。彼は感覚で情報を見ていても、必要だと思えば、ぐっと集中して吸収するところがあります。

野村 塚田先生にもお伺いします。金メダルをとった田知本選手は、リオ五輪前の世界ランキングが低く、日本人では唯一のノーシード選手となりました。彼女にとっては、五輪

前にあった二つの大会に出場してランキングを上げて臨むという選択肢もあつたと思うのですが、あえて出場しなかつたのは何かのデータ分析があつたのことだったのででしょうか？

担当記者や関係者しか知らないことかもしれないと思いますが、出場しなかつたことが彼女の性格ともマッチして、今回の金メダルという成績にながつたのではないかと思うのですが、塚田先生はどのように分析されますか？

塚田 オリンピック前の大会に出場するかどうかについては田知本選手とも話し合っていました。彼女は、物事を決めるときの優先順位の方非常に明確で、リスクとメリットを十分に理解して、どう行動するかを決めています。最初は、獲得できるポイントが一番高い5月の大会に照準を合わせていました。しかし、怪我をしてしまい、移動時間や調整時間を使ってまで万全ではない状況で出場して怪我を悪化させてはまずい、と出場を見送りました。田知本遥の強みは、自分でターゲットを絞つたら、最高の結果を得るためにど

のように持つていくかを非常に明確に考えるところです。外国人選手のデータも自分でチャートにして全部頭に叩き込んでいるのですね。

とはいえ、オリンピックをゴールに見据えて、真剣に取り組んできた彼女ですから、最後まで心が揺れて当然です。裏話ですが、「出るか、出ないか」については、それこそ3時間ごとくらいに彼女も意向を変えました。私たちスタッフはその度に振り回されていたのですが、私たちも最後には割り切つて、とことん話しを聞き、彼女のサポートに徹することにしました。

彼女はそういうことを繰り返して、だからこそ、五輪でも状況を好転させる試合ができたのだと思います。ノーシードだった彼女の最初の対戦相手は世界ランク1位の選手で、そこを勝てば、恐らく金メダルをとれるだろうと思っていました。そして彼女は見事に勝利をものにしました。やはり、日ごろ本人の取り組みと、周りとの信頼関係で生きる部分があるのかなと思います。

野村 これまで私もいろいろなスポーツを見てきましたが、鈴木さんは、

データをどのようにうまく柔道に絡めていきたいと考えていますか？

鈴木 私は、データが全てだとは思っていません。どれだけ数値を出しても、スタッフとコーチがそれを共有しきれていないと力は発揮できないのです。全員が明確にアプローチを理解していたことが、今回の力になったのだと思います。

野村 井上監督はいかがですか？まだまだデータを活用できる場面があると思いますが、2020年に向けて、どのようにトレーニングなどを変えていきたいと思われませんか？

井上 私はこれからも、データを活用していきたいと思っています。なぜなら、選手の勝つ確率を1%でも2%でも上げてくれるからです。鈴木さんのお仕事は本当に大変だと思います。ありとあらゆるデータを手に入れて、私たちが「こういうデータを提示してくれ」って言ったものでのオーダーは不要かも？と思うようなデータもあるのですが、彼は膨大な時間、あらゆる手段を駆使し

て対応してくれます。どれほど感謝してもしきれないほどです。

さらに鈴木さんは、他の面でも私をサポートしてくれています。塚田先生が田知本選手のことでも悩んでいたときに、塚田先生にお菓子を差し入れるなど、そういう役割もしてくれていました。私にはとてもできません(笑)。私は個の力には限界があると思っっているので、彼の力を借りながら、いかに総合力で戦っていくか、オールジャパンで世界と戦っていききたいと思っています。

野村 山下先生、リオ五輪では日本選手団の副団長として、全日本柔道連盟の強化委員長として井上体制を見てこられたと思うのですが、先生が強化コーチをされていた時とはまた違った挑戦だと思えます。以前であれば「量」を求める練習が多かったように思うのですが、この移り変わりをごどのように考えておられますか？

山下 井上監督は非常によく考えてやっているとします。選手としても素晴らしいですが、指導者としてどんどん大きくなって、どんどん

吸収している。限界を感じさせませんね。組織として戦うということ

で、井上監督の周りにどんどん人が集まってきています。それは素晴らしいことです。井上監督の勉強熱心さ、向上心、人としての魅力、そういうところに人材が集まっているのだと思います。

私は2年前から国際柔道連盟の理事に復帰していますが、「日本の柔道は素晴らしい、特に指導者の姿勢が素晴らしい」といわれるようになりました。ロンドン五輪で惨敗した時には「何だ、日本の指導者は」と外国の方々から言われ、「日本柔道は大丈夫か？」と心配されました。

やはり組織は「リーダー次第」ということがはつきり言えると思えます。井上監督自身が本当に謙虚で、誰からも学ぼうという姿勢がありますから。そういう人間的な魅力が様々なことを引き付けている。これからは2020年に向けて今まで以上に期待してもらえればと思います。そして、今回は女子の代表監督も変わりました。彼も井上監督に負けず、素晴らしい指導者だと思います。男子も女子も大きな目標に向かって。今までよりもさらにさらに進化し2

020年を迎えてくれるのではないかと思っています。

020年を迎えてくれるのではないかと思っています。

野村 山下先生、ありがとうございます。柔道教育ソリダリティーは国際交流活動を熱心に進めておられます。山下先生も井上先生も塚田先生も、英語圏への留学経験が先ずです。海外での豊かな経験が、先生方の魅力につながっていると思います。

新聞社で私は、柔道の他にラグビーも担当しています。日本のラグビーは世界ではまだ発展途上ですが、柔道は日本が世界のトップに立っておられます。取材記者としてとても誇りに感じておりますが、今後さらに海外で活躍できる選手、社会に貢献できる選手を育成するためには、どのようにしていけば良いと思っておられますか？

井上 私が2年間の留学経験で強く感じたのは、自分自身の無力さです。「世界は本当に広いのだな、自分には伸ばすところがまだまだあるのだな」ということに気づかせてくれた、本当に貴重な2年間でした。その経験が、私の今の考え方や、強化方針

をつくる上で役に立っております。非常に幸せなことだと実感しています。

さらに現在では、東海大学の様々な先生方からアドバイスをいただけるようにもなりました。世界と戦っていくには、世界の目線や基準が大切です。「日本の柔道はこうだから」と、一面的に判断する選手は世界では勝てません。

例えば、日本の審判と世界の審判では目線の向け方も全く違います。日本の先生方はどうしても「日本の柔道」で試合を見てしまう。海外で試合をして、「これは取った。これは取らなかった。世界の審判は酷い」と言っているようでは勝てません。世界の動きや流れに対応できる人こそが、世界で戦っていける選手だと思います。

そして、もう一つ必要なのは情報力です。情報をどれだけ集められるか。集めた情報のうち、何が自分にとって必要かを感じ取る選手が世界で通用する選手だと思います。

野村 世界基準の選手を育てるということですが、リオ五輪に至る道のりでも、原沢選手をモンゴルに派遣

するなど、多くの選手が海外に行く機会を増やしておられたと思います。2020年に向けてもそういう機会を作っていきたいと考えておられますか？

井上 非常に必要なことで、これからも選手を海外に連れていきたいと思っております。日本にいる時の日本観や世界観と、世界にいる時の日本観や世界観は全く違いますから。そういうものを感じ取って、「だから、何が必要なのか」を考えることが大切です。

野村 審判やルールへの適応についてお話しがりましたが、新しいルールで「有効」がなくなるとか、男子の試合時間も4分になるなど、対応を迫られていると思うのですが、その点はどのように考えておられますか？

井上 柔道がこれからも進化していく上で、変化は大切だと思います。ダーウィンの進化論でも、「賢いものが生き続けられるのではなく、強いものが生き続けられるわけではない。変化に対応できたものが生き続けら

れる」というようなことが示されています。まさしくその通りだと思います。いち早く変わる準備を、どれだけやれるのかもこれからの勝負です。

野村 塚田先生は、変化に対応できる力を、女子選手にどう育みたいと思っておりますか？

塚田 やるべきことが多すぎて目まぐるしいのですが、私たちスタッフが整理し、選手に上手く伝えていかなければならぬと思っています。

井上監督がおっしゃったように、最後の土壇場で力を発揮できるのは自立した選手だと本当に思います。そのような選手を作るには、環境やルールの変化への対応も必要です。ちよつとした変化に振り回されないようにすることも必要な対応力だと思います。いわゆる「厚かましき」のようなものも選手が身につけられるように接して行きたいと思っております。

野村 鈴木さんは、データの面から新ルールにどう対応しようと思っておられますか？

鈴木 今は、旧ルールと新ルールの分析項目を全て入れ替えないといけない大変な時期です。ですが、試合というものは「生もの」ですので、あまりルールに囚われず、変化への対応というよりも、数字をはじめ出して気になる素材があれば示す、その先をフラットな目線で見ることがあるのかなと思っています。

野村 柔道に新ルールが導入されることで、国内では「技の質が落ちるのではないか」という話も出ています。私は、国際柔道連盟のマリウス・ビゼール会長にも取材させていただきましたことがあります。「柔道がさらに上向きになるように」「柔道を知らない人にもわかりやすいように」という意図で改正された部分があると受け止めており、柔道が進化する一つのきっかけだとも思っています。ただし、柔道には「変わってはいけないもの」もあると思うのです。それを私は、柔道の教育的価値だと思っております。山下先生は「柔道がぶれてはいけないこと」について、どのようにお考えですか？

山下 確かに、時代とともに変化して良いものと、変化してはいけないものがあります。一つ、分かりやすい例をご紹介します。アメリカで柔道はそれほど人気がありません。私は国際柔道連盟の理事になる少し前の2013年に、ニューヨークに一ヶ月ほど語学留学をしました。その時に、アメリカの大手放送会社NBCの副社長であるピーター・ガードナー氏と1時間ほど意見交換をする機会がありました。

ガードナー氏は、「正直、柔道にはあまり関心がなかったけれど、見てみると面白いね。豪快で楽しめた」とおっしゃったので、私は、「アメリカでは人気がありません。どうしたら人気が出ると思いますか?」と尋ねました。

すると、「うーん。まず、選手も審判もコーチもあまり感情を表に出さないね。アメリカ人は自分の感情をストレートに出すことに喜びを感じる。選手はもつと喜びも怒りも失望も表に出して、レフェリーもコーチも大げさなぐらいが良いと思う」と答え、さらに「やはり日本語では何を言っているのかさっぱりわからない。アメリカで支持されるためには、英語に変えたほうがいいね」と話しておられました。

どちらも、なかなか説得力のある言葉でしたが、意見を交換して部屋を出る時に気がつきました。「ああ、この二つこそが、柔道が絶対に変えてはいけないことなのだ」と。

柔道がなぜ、礼に始まり礼に終わるのか。柔道の目的は、相手と戦うことではないからです。相手がいるからこそ自分を高めることができるわけですから、柔道で最も大切なことの1つは、相手に対して謙遜の意を示すことです。それが日本的には「おじぎ」をするということになります。この柔道の教育的価値を柔道連盟では大切にしているのです。

そしてもう一つはガッツポーズです。私これまで、柔道関係者のみならず多くの方々からガッツポーズについて議論を仕掛けられてきました。例えば剣道では、ガッツポーズをするとポイントを失います。ガッツポーズをさせたくないのなら、剣道のようにルールにしてしまえば良いではないか、といった意見も聞かれます。

しかし、私はそれには断固反対です。ルールで縛るのでは意味がない。

どのような状況でも、本人が自分の気持ちをコントロールできるようにするのが大切なのです。試合でガッツポーズをしないだけでなく、ルールとは関係のない畳の外でも、さまざまな場面で相手への尊敬の念を忘れない、どれほど辛く苦しい状況でも相手を思いやる気持ちを失わないことが大切なのです。

ガードナーさんのお話しで再確認できたことは、戦う相手に対する尊敬の気持ちと、柔道が大切にしていることを普段の生活の中でも大切にして生かしていくという、嘉納治五郎師範の二つの教えでした。要するに、柔道による人間教育を変えてしまったら、形は柔道であっても中身は柔道ではなくなるのです。

そして、柔道で使っている言葉が日本語であるからこそ、私はそれを通して、世界の人々に日本に興味を持ってもらえるのだと思っています。ロシアのプーチン大統領が私におっしゃったことがあります。「礼、始め、引き分け。はじめは何のことだかさっぱりわからなかった。しかし、これらの言葉を頻繁に使っているうちに、意味がわかると同時に、日本の文化に対する興味が湧いてきた」と。

プーチン大統領は日口の会談で北方領土について話をされた際に、「引き分け」という表現をされました。

ですから私は、日本の国益という立場から、どのような状況になっても、柔道における日本語の使用は体を張って守らなければならないと思っています。このような柔道の教育的価値と、ガードナーさんが面白いと言ってくれた「日本の価値」は、絶対に変えてはいけないと思います。それ以外のことは、時代とともに変わっても構いません。私は、今回のルール改正にも関わっていませんが、熱心な議論が行われました。柔道をやったことのない人が見ても面白い、やりたいと思うような柔道になるのか。メディアでもっと取り上げてもらえるような柔道になるのか。私にとっては、教育的な価値が損なわれないことが譲れないことでした。

「スポーツとしての柔道と文化としての柔道」というせめぎ合いでは、やはりバランスが難しいところです。今回のルール改正に関わる議論を通じて、国際柔道連盟もずいぶん変わったなという印象を受けています。

野村 ありがとうございます。井上監督は「最強にして最高の選手」と話しておられました。文化としての柔道とスポーツとしての柔道を融合し、強くて、素晴らしい人間性を有した柔道家を育てることが2020年を盛り上げ、その後につながるのではないかと思っています。最後に、人間教育を含めた強化について意気込みをお願いします。

井上 今の山下先生のお話で今日のシンポジウムはまとまったなと思っ
ていましたので、しかも難しいご質問に今ドキドキしています。

五輪を見据え「スポーツとしての柔道」をしっかりとやるのが、まず私のやるべき仕事だと思っています。そして、私たちが精神的にも技術的にも研ぎ澄まされた柔道を世界との戦いで披露することが、日本柔道界にとっても、世界の柔道界にとっても必要なのだと考えているところです。そういった責務を私自身
がしっかりと受け止めて、選手たちともしっかりと目標を共有して、これからも戦っていききたいと思いま

す。ありがとうございます。そして戦いで我々の意気も大きく下がって

光本 熱い気持ちを語っていただき、ありがとうございます。野村さんもありがとうございました。お時間はあまりないのですが、ご質問のある方はいらっしゃいますか？

参加者 世界最強の柔道家というところで、100キロ超級のリネール選手が、リオ五輪でどのような柔道を見せてくれるのか、とても楽しみにしていました。でも、あの決勝戦は納得がいきません。テレビ解説の方も辛口のコメントでしたが、あれで金メダルです。率直な感想を元世界最強の山下先生からお聞かせ願いたいと思います。

山下 私もいろいろところで発言しています。今回のリオ五輪での柔道は、100キロ級までは過去にない素晴らしい試合が続いたと思います。国際柔道連盟の理事の皆さんも、「我々が進めてきた改革は成功だったようだ」と感じている様子でした。

しましました。大会後のルール変更もあの試合がきっかけです。オリンピックという大切な大会で、あのよ

うな指導一つの差で勝負を決めてはいけないということになりました。新しいルールでは、ゴールデンスコアの延長戦に入ります。

ただし、リネール選手は本当にすごい選手です。過去には世界選手権を全試合一本勝ちで優勝したパワーのある実力者です。今回のリオ五輪では、とにかく勝ちにこだわってました。原沢選手との試合では、徹底的に組ませませんでした。初めて戦う原沢選手のことが怖かったのかもしれないですね。個人的には今後、リネール選手に対して「史上最強」という言葉は使わない方が良いのではないかと思います。

これまでフランスの柔道記者と「もしリネールと山下が戦ったらどちらが強いかわかるか」というやりとりがよくありました。けれども、もうこの質問も来ないと思います。史上最強のイメージとは程遠い試合内容でしたから。世界の柔道関係者がリネールの試合を楽しみにしていました。フランス人も含めて、その大半ががっかりしたと思

います。

光本 ありがとうございます。野村さん、コーデイナーターありがとうございました。そしてパネリストの方々も本当にありがとうございます。みなさん、もう一度拍手をお願いします。

* * *

柔道教育ソリダリティーのバックナンバー講演録をご要望の方は、事務局0463(58)1211(内線3524)までご連絡下さい。講演録は、無料で配布しております。

ホームページからもダウンロードすることが出来ます。【<http://npo-jks.jp>】

野村 ありがとうございます。そして戦いで我々の意気も大きく下がって

しましました。大会後のルール変更もあの試合がきっかけです。オリンピックという大切な大会で、あのよ

うな指導一つの差で勝負を決めてはいけないということになりました。新しいルールでは、ゴールデンスコアの延長戦に入ります。

ただし、リネール選手は本当にすごい選手です。過去には世界選手権を全試合一本勝ちで優勝したパワーのある実力者です。今回のリオ五輪では、とにかく勝ちにこだわってました。原沢選手との試合では、徹底的に組ませませんでした。初めて戦う原沢選手のことが怖かったのかもしれないですね。個人的には今後、リネール選手に対して「史上最強」という言葉は使わない方が良いのではないかと思います。